令和二年度

一般C日程入学試験問題

国語

注意事項

1. 願書提出時に、この試験科目の受験を申請していない人は受験できません。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
3. 解答は解答用紙の解答欄にマークしなさい。
4. 解答用紙にある「マーク記入例」と「記入上の注意」をよく読みなさい。
5. この問題冊子は、十六ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

九州女子大学
九州女子短期大学

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人が本を読まなくなった。あれほど堅固に見えた〈紙の本〉への信頼感がぐらりと揺らいだように思える。このさき私たちの読書環境はどう変わってしまうのだろうか。

こうした不安をもたらした犯人はデジタル革命だという説があります。ゲームやＳＮＳのせいだとか、なにもかもインターネットがわるいのだとか――。

でも、はたしてそう簡単にいいきってしまえるのかどうか。

だいいち若者の「本ばなれ」が顕著（ア）になった七〇年代末には、デジタル時代はまだ緒（A）についたばかり。戦後はじめて本の総売上が下降に転じたのも、インターネットや携帯電話が広く定着したのも、すべて九〇年代が終わり近くなってからのことなのです。であるからには、どう考えても読書習慣のおとろえの責任をまるごとデジタル革命に負わせることにはむりがある。それよりも、このおとろえは二十世紀後半、デジタル革命の開始以前に、〈紙の本〉の世界の内側で徐々にジョウセ（a）イされてきたと考えておくほうが、よほど自然なのではないだろうか。

もうひとついえば、新しく興隆（イ）したメディアが〈紙の本〉をほろぼすという［　I　］にしても、それ自体は新しいものではなく、すでに出版産業化が本格化した一九二〇年代にはすがたを現していました。このときの本の敵は映画（無声映画）です。たとえばチェコの人気作家でジャーナリストのカレル・チャペック。かれは一九二五年に、早くも成熟期に足を踏み入れた映画の力をたたえて、これからは本を読む「概念的タイプ（老年世代）」にかわって映画で再教育された「視覚型人間（現代の人間）」が増えてゆくだろう、と予言していた。

読書タイプの人間は忍耐強い。周囲の状況を認識し、事件の記録のなかに腰を据え、話を最初から最後までたどっていくだけの十分な時間を取る。

視覚的タイプはそれほど忍耐強くありません。状況を一目で把握し、時間をかけずに話の筋を飲み込んでしまいたがります。そして、次の瞬間にはもう新しい何かを物色しているのです。しかし、もしかしたら、たっぷり息を吸う

ために、映像の急流から逃れ、本に戻る人も出てくるかもしれません。（略）多分ね、そんなこと誰にわかるのです？――多分、書物はだんだんと死に絶えていくでしょう。もしかしたらバビロンの文字の書かれた煉瓦のように奇妙な記念碑になるでしょう。でも、芸術は死に絶えることはありません。

（「目の世代」）

文脈がすこし混乱しているので、チャペックが「本に戻る人」[C]に批評的な距離をおいているようにも読めます。でも、たぶんそうじゃないな。かれが人間をつくりかえる映画特有のスピード感に魅せられていたのは事実でしょうが、それと同時に、ねばりづよく「周囲の状況を認識」し、十分な時間をかけて「最初から最後まで」話につきあうという「読書タイプの人間」の習性にも、おなじくらい、もしくはそれ以上につよく共感していた。チャペックが同時期に書いたいくつかのエッセイから見ても、かれのうちに「進歩する人間」とならんで、ひとりの確信的な「本に戻る人」がいたことはあまりにもあきらかなのです。

そして、このチャペックのうちなる「読書タイプの人間」と「視覚型人間」との葛藤の劇が、百年後、映画をインターネットに、「視覚型人間」を「デジタル型人間」におきかえて、そっくりそのまま繰りかえされます。私の場合でいえば、数年まえ、たまたま雑誌で津村記久子の「咳と熟読」という文章を読み、おや、おれは以前、これと似たようなことをどこかで読んだことがあるぞと、チャペックのこのエッセイのことを思いだした。

津村の「咳と熟読」によると、いっとき本をはなれてインターネットに熱中した彼女は、やがてネット情報の「瞬間湯沸かし」的な収集に疲れて、ふたたび本を読むようになったらしい。「情報」をいそがしく「脳味噌に注入」するかのごとき「［　Ⅱ　］」のなかで「逆説的に、自分が本から得ていた主な栄養は「情報」ではないのだな」と気づいたというのです。

本を読み始めた頃、読むことは、ひたすら体験だった。図書室で借りてきた本のぼろぼろさ加減とその物語は、一体のものとなって記憶されている。喘息の発作の後、親に隠れて本を読んでいる自分自身もまた、物語の一部だったように思える。ああ、『チム・ラビットのぼうけん』はおもしろかったなあ、と思い出す時は、必ず、小学二年の時に住んでいたマンションの六畳の寝室と、窓から差し込む昼間の光と、苦かった薬と裏腹に魅力的だった吸入器の味[B]

のことを思い出す。

そういう、体を伴った読書を再び求める。

ネット情報とのつきあいにヒ**ヘイ**[b]して「読書を再び求める」ようになった。つまりはそういうこと。彼女もまた、チャペックがいう「たっぷり息を吸うために、映像〔情報〕の急流から逃れ、本に戻る人」のひとりだったのです。

チャペックと津村記久子――。

この二人の作家の百年の時をへだてた体験をならべてみると、〈読書の黄金時代〉としての二十世紀が、じつは終始、かならずしも安定したものでありつづけていたわけではないことがわかります。いかにも私たちは、いまデジタル革命の衝撃で〈紙の本〉がはじめて危機にさらされているように感じている。でもちがうんですね。チャペックによると、すでに前世紀の二〇年代、〈読書の黄金時代〉がその盛期にさしかかろうとするころには、映画の成熟によって、かれ自身をふくむ本好きたちまでが、いち早く、その危機を予感するようになっていたらしい。

そして、この点にかかわってもうひとつ見すごしてならないのが、この危機が同時に〈紙の本〉の力を人びとが発見しなおす機会になったということです。

日用品としての本に慣れすぎて、私たちはともすればそのありがた味を忘れてしまう。そんなとき、ふいに衝撃的ななにごとかにぶつかり、忘れていたありがた味を新鮮なものとして見つけなおす。〈読書の黄金時代〉前半期での「なにごとか」は映画でしたが、それに匹敵する後半期のできごとがインターネットの出現です。そして映画の場合と同様に、今回も新しい「なにごとか」にシン**カン**[c]させられた〈紙の本〉が、逆に、あわただしい情報ラッシュに疲れはてた人間がそこに戻ってゆく代替のきかない強力な場として再発見される。それがチャペックの「本に戻る」だったし、津村記久子のいう「読書を再び求める」でもあるのでしょう。

（中略）

では〈読書の黄金時代〉が終わったとして、このさき私たちの読書はどう変わってゆくのだろうか。むずかしい問いです。私には「かならずこうなる」と自信をもって答える力はない。そこでとりあえず、すでにのべた仮説をもういちど単純化して繰りかえさせてもらうと、

――本というメディアが歴史上はじめて〈紙の本〉と〈電子の本〉というふたつの方向に分岐しようとしている。私たちがふつう「読書」と呼んでいる行為は、当分のあいだ、そのふたつの方向の前者、つまり〈紙の本〉が担っていくことになるだろう。

よりストレートにいってしまえば、たとえ〈読書の黄金時代〉が終わろうとも、〈紙の本〉による読書は終わらないだろうということです。そして「当分のあいだ」とは、もしもいつか〈電子の本〉をしばる強欲経済のしくみに激変が生じたら、そこであらためて考えなおそうではないかというほどの意味――。

いずれにせよ、これまで私たちが読書と呼んできた行為は、これからもしばらくは、さしたる変化なくつづいてゆくでしょう。

ただし、本を積極的に読む人のかずが減り、産業としての出版のキバンがここまで頼りなくなってしまったからには、それは過去のたんなる継続ではありえない。だから、やはり〈再発見〉なのです。「むかしにくらべて若い連中が本を読まなくなった」とか「古き良き読書習慣を守れ」とか、なげいたり腹を立てているだけではだめ。未来へすすむには、そのままの［Ⅲ］への願望だけでなく思いきった切断が必要なのです。

もし「ひとりで黙って読む。自発的に、たいていはじぶんの部屋で」という読書がそこまで大事なものであるなら、その魅力を再発見するだけのためにも、いちどはそれを失ってみたほうがいい。そうすれば、たぶん私ごとき「老年世代」が消えたあとの世界で、人びとは本の魅力をあらためて発見しなおし、そこから〈紙の本〉と〈電子の本〉をひっくるめての新しい読書の習慣を再構築してゆくにちがいない。

（津野海太郎『読書と日本人』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変、段落の変更・省略などを施した箇所がある。）

問一　傍線部ア～ウの漢字の読みとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　ア＝ 1 、イ＝ 2 、ウ＝ 3 ）

ア　顕著　［1］けんきょ　［2］かんしょ　［3］がんきょ　［4］けんちょ　［5］けんちゃ

イ　興隆　［1］こうりゅう　［2］きょうりょう　［3］こうりょう　［4］こうこう　［5］きょうこう

ウ　強欲　［1］きょうよく　［2］ごうほつ　［3］ごうよく　［4］きょうほつ　［5］きょうほく

問二　傍線部ア「顕著」の対義語としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 4 ）

［1］空虚　［2］薄弱　［3］粗雑　［4］曖昧　［5］簡略

問三　傍線部a～dの片仮名の太字箇所に用いる漢字としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　a＝ 5 、b＝ 6 、c＝ 7 、d＝ 8 ）

a　**ジョウ**セイ　［1］情　［2］譲　［3］嬢　［4］醸　［5］穣

b　ヒ**ヘイ**　［1］兵　［2］弊　［3］幣　［4］陛　［5］閉

c　シン**カン**　［1］感　［2］管　［3］艦　［4］撼　［5］刊

d　キ**バン**　［1］番　［2］版　［3］盤　［4］判　［5］幡

問四　Ⅰ〜Ⅲに入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　Ⅰ＝9、Ⅱ＝10、Ⅲ＝11）

Ⅰ　［1］不振の予兆　［2］負の連鎖　［3］危機の構図　［4］崩壊の促進　［5］発達の仕掛け

Ⅱ　［1］枯渇状態　［2］空腹状態　［3］欠落状態　［4］満足状態　［5］飽和状態

Ⅲ　［1］継続　［2］断裂　［3］連続　［4］停止　［5］理想

問五　二重傍線部A・Bの意味としてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　A＝12、B＝13）

A　緒についた

［1］見通しがもて軌道に乗り出すこと

［2］始めたばかりでうまくいかないこと

［3］始めるために少し試してみること

［4］見通しがたたず試行錯誤すること

B　裏腹に

［1］出し抜けに　［2］不自然に　［3］正反対に　［4］一方的に

問六　波線部Cの「本に戻る人」とはどのような人か。その説明としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号　14）

［1］映画で再教育され、せっかく「視覚的タイプの人間」になれたのにもかかわらず、その価値を全く理解しないで、「概念的タイプの人間」に戻ろうとする人

［2］映画は急激に人間をつくりかえる力はあるが、そのことにあきて、「進歩する人間」になることを断念して、前時代的な「読書タイプの人間」に戻ろうとする人

［3］映像を基に視覚的に瞬時に状況把握ができる「進歩する人間」になったが、そのことに耐えきれなくなって、「概念的タイプの人間」に立ち戻ろうとする人

［4］時間をかけずに話の筋を飲み込む「視覚的タイプの人間」になっても、なおじっくりと時間をかけて状況認識をすることも求めて、再び読書に向かおうとする人

［5］映画は映像の力で瞬時に人間をつくりかえる力があるが、その影響力の大きさに危うさを感じて、問題解決のため、情緒的に読書を再び求めようとする人

問七　本文の内容と合致しないものとして、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 15 ）

［1］〈読書の黄金時代〉としての二十世紀には、映画やインターネットといった新しいメディアの出現に伴い、紙の本による読書経験が、その質を問われるようになった。しかし同時に、紙の本を読むことの意味が、再び見直されることにもなった。

［2］次から次へと情報を収集していくことを余儀なくされる環境に疲れてしまった人間にとって、そのように疲れてしまうほどに情報収集にあくせくしなくてもよいことを思い出させてくれる重要な場があり、それは〈紙の本〉によってもたらされるものである。

［3］人が本を読まなくなったのは、デジタル革命が開始してからであり、また新しく興隆した映画というメディアの影響も大きいといえる。

［4］ 私たちは、デジタル革命の衝撃で〈紙の本〉がはじめて危機にさらされているように感じている。しかし、すでに前世紀の二〇年代、その危機を予感していた。この危機が同時に〈紙の本〉の力を人びとが発見しなおす機会にもなったことは事実である。

［5］ 〈読書の黄金時代〉としての二十世紀は、かならずしも安定したものでありつづけていたわけではない。

問八　波線部Dは、どのような意味か。その説明としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 16 ）

［1］ ネット情報依存が原因となって、本を読まない人が増え、このままでは読書習慣がなくなることが懸念されるので、本の魅力でネット依存に歯止めをかけることが必要である。

［2］ 映画やインターネットの新メディアの出現で本が姿を消し、読書習慣がなくなりかねない状況だが、読書の魅力の再発見により、再び読書の重要性が認められるようになるだろう。

［3］ デジタル革命に伴う電子の本の出現と普及によって、本の魅力が改めて見直され、電子の本による読書を通じて、読書は今後一層魅力的なものになっていくと考えられる。

［4］ 本の魅力の再発見によって、視覚的人間から読書タイプの人間に立ち戻るという読書の復権こそが、読書の新しい形態と習慣を生む唯一の方法であると考えられる。

［5］ 本の魅力は「老年世代」にしかわからないため、それを伝えることで若者も本の魅力を再発見し、読書という行為を続けるに違いない。

問九　神の愛を探求し続けた作家であり、『白い人』『海と毒薬』『沈黙』などの作品によって知られる作家は誰か。解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 17 ）

［1］ 安岡正太郎　［2］ 遠藤周作　［3］ 司馬遼太郎　［4］ 井上ひさし　［5］ 北杜夫

問十　ことわざ・慣用句の空欄 ① ～ ⑤ に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号 ① = 18 、② = 19 、③ = 20 、④ = 21 、⑤ = 22 ）

① ① の夢大阪の夢
② ② の舞台から飛び下りる
③ 住めば ③
④ 敵は ④
⑤ ⑤ の蘆は伊勢の浜荻

［1］ 都　［2］ 本能寺　［3］ 難波　［4］ 京　［5］ 清水

問十一　次の同音異義語の組み合わせでもっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　あ＝ 23 、い＝ 24 ）

あ　**コウセイ**

①　コウセイ な判断を下す。　②　福利 コウセイ に恵まれる。　③　自力で コウセイ する。

④　文章 コウセイ がよい。

［1］　①　厚生　②　構成　③　更正　④　公正

［2］　①　公正　②　更生　③　厚生　④　構成

［3］　①　更正　②　厚生　③　更生　④　構成

［4］　①　公正　②　厚生　③　更生　④　構成

い　**セイサン**

①　運賃を セイサン する。　②　セイサン な事件が起こる。　③　借金を セイサン する。

④　試合に勝つ セイサン がある。

［1］　①　精算　②　凄惨　③　清算　④　正餐

［2］　①　成算　②　正餐　③　生産　④　精算

［3］　①　清算　②　凄惨　③　精算　④　成算

［4］　①　精算　②　凄惨　③　清算　④　成算

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

されば、下野国日光山の麓に磯崎殿とて侍一人あり［A］が、頼朝の御時、本領相違して一両年有りけり。安堵の為に在鎌倉しけり。留守の女房、万の営みをし、ある時は鏡を代替へ、衣裳を拵へなどして上せ、その家の神や仏に、「今一度、本領安堵させてたび給へ」と、明け暮れ祈誓しきりにしけるによつてやらん、やがて、本領安堵して下野に下りけるに、男の心の拙さは別の女房を連れて下り、堀外に家を造り、新殿と名付け、置きけり。

家の女房思ふやう、「あら、腹立ちの事や。我、万の営みをして在鎌倉を届けたる甲斐もなく、かかる振舞ひの情けなき事よ」と、明け暮れ恨み託ちけるほどに、男、申しけるやうは、「高きも卑しきもかやうの事は我一人に限らず。①昔語りにも、まづ、源氏の大将は、紫の縁を尋ね、桐壺の夕べの煙速やかに、帚木の夜の言の葉に夕顔の露の思ひをなして、紅葉賀の匂ひ深く、世を空蟬の音を聞き、賢木葉の挿して後世をば願はずして花散里に心を留め、生死流浪の須磨の浦を出でかね、四智円明の明石の浦に澪標幾ばく心を苦しめ、また、在原業平は三千七百三十四人とかや承り及ぶぞかし。身や姿こそ変はるとも心は劣り候ふべきか。よしよし、赦し候へ。かの人は鎌倉にて自らに情けを深く懸けし人なりければ、打ち捨て難くして連れ奉りける。我が身の遣る方なき時は情けを受け、また本づきたる時は捨つる事は男の本意と覚えず。されば、ある文に曰く、『貧賤の知音を忘るる事なかれ。糟糠の妻を堂を返すな』と申す事あり。『我が身の計会の時の女房と舅を捨つるな』と承り候ふ。されば、紀有常の女は妬き思ひを押し込めし胸の埋み火にて、提子の水の沸き返りけるとかや。

つれなくも提子の水の沸き返り胸の煙は立つや立たずや

と詠じけるも夢となりて候ふ。何事もただ、我に赦し給へ」とて、手を擦りけれども、女心のはかなさは、さらに打ち置く心の暇もなく、かの女房思ふやう、「さもあれ、鎌倉より下りたる者の顔は縦長か横長か、一目見［B］」と常々、思ひけるところに、ある時、殿は用の事ありて鎌倉に上り給ひし留守に、蔵一太夫と申す猿楽のその所に着きて礼に来たりける。人を出して言はするやうは、「殿は鎌倉へ上り候ふ。やがて、御下りあるべし。しばらく逗留し給へ」とて酒など飲ませて帰しける。

さて、やがて、猿楽の宿に人を遣はして「ちと脅すべき子あり。恐ろしき鬼の面一つ、半切に赤頭添へて貸し給へ」と借

りければ、猿楽思ふやう、「女房の借り物には似合はぬ物かな」と思ひけれども②「否」と申すべきにあらざれば、貸し参らせける。

やがてその日も暮れければ、かの半切取つて付け、赤頭被り、打杖執つて、我が家を忍び出で、ただ一人、外の女房[ii]の所へ、忍びやかに門を開けて内に入り、ややしばらくためらひけり。はや人気も静まり、小夜更け方にもなりけるに、窓より覗きて見れば、年十七八の女房[iii]の、翡翠の髪ざし揺り乱し、額の絶え間より仄かに見ゆる眉墨厳しく、紅の小袖脱ぎかけて、油火ほのぼのと立てさせ、草子打ち見て居ながら、空薫きして匂ひ、顔ばせ世の常ならず。「姨捨山に清見関を並べ、柳が枝に桜の花を咲かせ、梅の匂ひを匂はせても、なほ飽かずなり。姿物によくよく譬ふれば漢の武帝の妃、または楊貴妃、李夫人もこれには如何で優るべき。如何なる心無き人なりとも、この姿を見るならば、静心無き恋とも憧れつべき人なり。それに我が影を並ぶれば、年半ばも老け過ぎたる女の、色黒く髪赤く、子持ちが母の恥づかしく」、また、打ち返し思ふやう、「いかに我が姿美しければとて、人の夫を取るものか。あら恨めしや。情けなや」と守り居たる折節に、かの女房[iv]の乳母桐壺を召して、「何とやらん。いつよりも今宵は心凄く、殿の御事のみ思はるるぞや。あはれあはれ、疾く御下りあれかし。さらぬだに、一人寝覚めの暁は物の寂しきもの」と語りて、かくなん、

Ⅰ 山鳥の尾の上の雲を隔てても心は君に添はぬ間ぞなき

など、打ち詠じておはしけり。

（『磯崎』による。ただし、出題に際して、字句や表記の改変・削除を施した箇所がある。）

【注】本領相違…期待に相違して本領を安堵してもらえなかったこと。
安堵…領地の所有権を将軍などに保証してもらうこと。
計会…やりくりがつかず困窮すること。
半切…大口袴に仕立てた能装束の一つ。
赤頭…能楽などで使われる赤毛のかつら。
姨捨山…長野県中北部冠着山の別称。姨捨伝説の山としても知られる名勝地。

清見関…静岡県清水市にある、対岸に三保松原を望む名勝地。清見潟にあった関所。

問一　A に入るものとしてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 25 ）

［1］ けら　［2］ けり　［3］ ける　［4］ けれ　［5］ けよ

問二　B に入る自己の願望を表す助詞としてもっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号 26 ）

［1］ ばや　［2］ かし　［3］ なむ　［4］ まし　［5］ べし

問三　波線部a、bの敬語についての説明として、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じものを繰り返し用いてもよい。

（解答番号　a＝ 27 、b＝ 28 ）

［1］ 尊敬の本動詞で、作者から磯崎殿への敬意。
［2］ 尊敬の本動詞で、作者から別の女房への敬意。
［3］ 尊敬の補助動詞で、家の女房から別の女房への敬意。
［4］ 尊敬の補助動詞で、磯崎殿から家の女房への敬意。
［5］ 謙譲の補助動詞で、家の女房から磯崎殿への敬意。
［6］ 謙譲の補助動詞で、磯崎殿から別の女房への敬意。

［7］ 謙譲の本動詞で、作者から家の女房への敬意。
［8］ 謙譲の本動詞で、作者から別の女房への敬意。

問四 二重傍線部「在原業平」がモデルとされる文学作品として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。（解答番号 29 ）

［1］ 源氏物語　［2］ 伊勢物語　［3］ 大和物語　［4］ 平中物語　［5］ 狭衣物語

問五 傍線部①、②の解釈として、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。（解答番号 ①＝ 30 、②＝ 31 ）

① かやうの事は我一人に限らず
［1］ 本領を得るために新たに妻を持つことは、自分だけではなく、他の人もしているということ。
［2］ 夫のために、神仏に本領安堵を祈ることは、妻だけではなく、他の人もしているということ。
［3］ 鎌倉で妻以外の女性と親しくなることは、自分だけではなく、よくあることであるということ。
［4］ 不在の夫のために、留守を守ることは、妻だけではなく、他の人もしているということ。
［5］ 本妻とは別に、新たに妻を持つことは、自分だけではなく、他の人もしているということ。

② 「否」と申すべきにあらざれば、貸し参らせける
［1］ 「だめです」と申したが頼み込まれたので、お貸し申し上げた。
［2］ 「だめです」と申すことはできないので、お貸し申し上げた。
［3］ 「だめです」と申すことはできないので、使いに命じて貸しに行かせた。

［4］「だめです」と申すほどのものではないので、お貸し申し上げた。
［5］「だめです」と申すほどのものではないので、使いに命じて貸しに行かせた。

問六　本文中には、磯崎殿のもともとの妻（本妻）と鎌倉から連れ帰った妻（新妻）が出てくる。破線部i～ivはどちらの妻のことであるか、その組み合わせとして、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。（解答番号 32 ）

［1］ i 本妻　ii 新妻　iii 新妻　iv 新妻
［2］ i 本妻　ii 本妻　iii 新妻　iv 本妻
［3］ i 本妻　ii 新妻　iii 本妻　iv 新妻
［4］ i 新妻　ii 本妻　iii 新妻　iv 本妻
［5］ i 新妻　ii 新妻　iii 新妻　iv 新妻

問七　Ⅰ の和歌の解釈として、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。（解答番号 33 ）

［1］ 山鳥の尾が雲に届くほど長く、あなたと離れていると、あなたの心が離れていないか心配になる。
［2］ 山鳥の尾と同じくらい、あなたと離れていればいるほど、私の心はあなたに寄り添うようになる。
［3］ 山鳥が尾根の上の雲を隔てるように遠く隔たっていても、私の心があなたに添わない時はない。
［4］ 山鳥の尾のように、あなたと長い間遠く離れていると、あなたを思う気持ちが一層強くなる。
［5］ 山鳥が雲の上にいくように、あなたとの距離が離れていると、あなたの心がわからなくなる。

問八　本文と合致するものとして、もっとも適切なものを、解答群の中から一つ選びなさい。

（解答番号　34　）

［1］　磯崎殿は、鎌倉で新妻と遊んでおり、本領を安堵してもらうことができなかった。
［2］　本妻は、夫である磯崎殿が本領安堵してもらえるよう、鎌倉の神社と寺まで祈誓に行った。
［3］　磯崎殿は、新妻を連れ帰った訳を、鎌倉の老夫婦から娘の将来を頼まれたのだと説明した。
［4］　本妻は、蔵一太夫から借りた鬼の面と半切、赤頭で新妻のことを脅そうとした。
［5］　新妻は大変うつくしかったが、美人として名高い武帝の妃、楊貴妃や李夫人ほどではなかった。

問九　室町時代の芸能について説明をした次の文の括弧に当てはまるものとして、もっとも適切なものを、解答群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

（解答番号　ア＝35、イ＝36、ウ＝37）

室町時代には、（　ア　）によって能が大成したと言われている。（　ア　）は能楽論『風姿花伝』の著者でもある。また、シテ（主役）とアド（脇役）の口語による対話と物まねによる演芸で、能の間にはさまれて上演される（　イ　）も盛んになった。室町時代後期には、物語に合わせて舞われた（　ウ　）が行われた。内容は『義経記』や『曽我物語』などがあり、武将たちの間で人気が高かった。

［1］　観阿弥　［2］　世阿弥　［3］　日蓮　［4］　親鸞　［5］　金春禅竹
［6］　幸若舞　［7］　猿楽　［8］　田楽　［9］　謡曲　［10］　狂言